

であります。

此の園では一組つゝ毎日山登りをさせて體力の増進を計つ居る、これは體力のみでなく意志の鍛錬に大なる力があることは明らかです、よい思ひ付きと思ひます、これも先年倉橋先生が新標目といふ題で園外保育の必要を唱へられた結果でありませう、此の園外保育は京阪神共に盛んに行はれて居ます。

あまり長いお話をして時間が迫つて來ましたから遺憾ながらこれだけに致して置きます、要するに京阪神の何れも其土地の人をして必要を感せし

める迄に努力せられ保姆の學力を補充し研究して進まうくとせらるゝ勢がありくと見えて居る

事は斯道の爲め慶賀すべき事と思ひます、どうか研究の範圍が幼児保育といふ園の内に深くあつて、實際といつても結び付いて關西の原動力たるを祈つて居る次第であります、終りに臨み京阪神視察について到る所歓迎せられ親切に教示せられたことを謝し將來關東と相連結して氣脈を通じ東西呼應の實を挙げたいと思ひます、言たまゝ常軌を逸したる所は深く京阪神保育界の方々に謝する次第であります。(筆記、文責在記者)

『ポール・ド・ンビー』(六)

|| 英文學に現はれたる子供(二十五) ||

岡田みつ

ポールは、を執つきり臥床を離れなかつた。彼は臥床の中で太人しく市街の物音を聽いて居た。

どうして日々の時が經過て行くかは氣に止めず唯四邊の事物に目を配つて能く觀察てゐた。

搖らぐ窓の被ひから日光が室に射し込んで、それが突當りの壁に黄金色の水のやうに漂ふと、ボールは『夕方^タが來たのだと知つて空の色が赤くて美しからうと思つた。入日の影が消えて、暗黒^クが壁の隅から這ひ上つて來ると、ボールは其が次第次第に夜に變つて行くのを熟^{じつ}と見詰めて居た。彼は、心の中で、長い市街^{まち}には所々にランプが點火つて、星が靜かに頭の上で光つて居るなと思つた。彼の空想は、兎角に、此大都會の中央を流れてゐる大河の方へ、飛んで行く傾向があつた。あゝ、今は水の色が眞黒で、多數の星を宿してさぞ深く見えるだらう。而して殊に混々として、海へくと走つてゐる事であらうなどと考へた。夜が更けて、街の人通りも稀になり、遠くからの足音が近づいて來て、一寸止まつてまた彼方へ響を立て、消えて行くのがはつきり解る時刻になると、ボールは、枕邊の燈火の周圍^{ぐわい}に見える光の輪を見守つて、次の朝を氣長く待つのであつた。唯心に懸か

る事は、あの瀬の早い河の流れで、時にはどうかしてそれを堰き止めたいと思つて、小さな手で支へやうか、砂で塞がうかと苦心して見るが、依然^{でん}河は委細構はず流れく^て行くので彼は泣き出して仕舞ふ事もあつた。さやうの時には、いつも傍を離れず看護してゐる姉が、一言聲を懸けると、彼はすぐ機嫌を直して、姉の胸にその可憐の顔を押し當て、見た夢の話をして微笑^{にこり}した。

夜が白むで來ると、彼は日の出を待ち構へた。やがて、朝日が陽氣に室内で躍りかけると、彼は心に、高い寺院の塔が朝の空に聳えて、都會が再び蘇^{よみがへ}生^つて、河が流れ(いつもの通り瀬が早く)ながらピカ／＼光つて、田舎が露できらめいて居る處を描き出した。其内に聞き馴れた物の響や人聲が漸々^{だん}下の街に始まり、家の中でも召使の者が起き出て、立働^{たて}く氣色^{けしほ}がし、人の顔が室の入口に幾度か見えて、小聲で夜伽の者に彼の容體を尋ねるのが聞えた。いつも、ボールは、自分で「僕はよい

方だ。大分快方^いンだ、ありがたう。父様にさう申上げて御くれ。」と答へた。

少しづつ、ボールは日中のガサ／＼する物音^{おと}に車馬の響や、來往^{ゆき}の人の足^{あし}に音に疲れて、眠る事もあり、また流れて止まぬその河に責められて不安な、せはしない氣分に捉はれる事もあつた。「河はいつつて止まる時がないのでせうか、姉さん？僕はだん／＼河に連れて行かれるやうな心持ちなの」と折々姉に語つた。

姉は、いつでも、ボールを慰めて安心させてやつた。弟は、また毎日姉を勧めて、自分の枕に頭を載せさせて休息をさせるのが樂みであつた。「姉さんは始終僕を見てゐて下さるから、こんだは僕が姉さんを見張つて上げますよ。」といつて、自分は臥床の片隈に蒲團を支へに起き上らせて貰つて、姉が傍で眠つて居る中その姿を見守つては、時々撫で慈み、傍の者に對つて「ネ、姉さんは草臥れて居るのですね。幾晩も／＼夜更けまで僕を看

病するのでね」など、囁いた。

又其の暑くて明るい夏の一日も終り近くなつて、黄金色の水が突當りの壁に漂ふ頃となるのであつた。

ボールの所へ醫者が三人も來た。階下の室に集まつて、三人一所に上つて來るのが常であつた。

診察中は室が森^{しん}としてゐて、ボールは一人／＼をよく觀察するので（その醫者達が何と言つて居るのだから）ボールは誰にも問ひ質した事はなかつたが、三人の時計の音の差違^{ちが}ふのさへも知つて居た。一番ボールが注目したのは、ベツプ先生といふ醫者であつた。この醫者は、ボールの母が、フロレンスを抱いたまゝ、息が絶えた時に、傍に居た御醫者である、と前に聞いた事があるので、其を記憶してゐて、それが爲に此人が好きなので、恐い人だとは思はなかつた。

ボールには、周圍に居る人が不思議に變つた。ベツプ先生だと思つた人が、御父様になつて、兩

手に頭を埋めて居たり、ピンチンさんが安樂椅子でうとく眠つてゐたと思ふと、それがトツクス伯母さんに變つたりした。(いつも變らないのはフロレンスばかりであつた。)ポールは時々目を閉ぢては、こんど目を明くと誰に變はつて居るか知らむなど、平氣で考へる程であつたが、兩手に頭を埋めて居る人の姿が、幾度も現はれて、その姿がいつも同じ格好をして居て、物も言はず人からも話しかけられず、滅多に顔も上げないので、ポールは物懶げに「あれは眞實ほんとうの人かしらむ」と思つてゐた。夜になつても、その姿がまだ其處に居ると、少し恐いと思つた。

ポ「姉さん、あれ何？」

フ「何處にあるの」

ポ「あれ、あすこに、僕の臥床とこの裾すその邊に」

フ「何にもないのと。御父様ツきり。」

その姿は、頭を上げて立ち上り、傍近くへ来て、

「ポールや、父様がわからないかへ」と言つた。

ポールは、その顔を見て「之が僕の父様か。」と思つた。どうも變つてしまつたと熟と見入つてゐるうちに、その顔は非常に苦痛の面持になつた。ポールは兩手を伸して、その顔を捕へて引寄せやうと思ふうちに、その姿はつと臥床の側かたへを離れて、室から出て去つてしまつた。

ポールは胸をどきくさせながら姉を見たが、姉が言ひ出さうとして居る言葉を豫想して、急に姉の脣に自分の顔を押付けて、言はせないでしまつた。その次の時に、臥床の下手しもてにその姿を認めた時には、ポールは聲を掛けた。

ポ「御父様、そんなに僕に御氣遣ひなさるな。僕は氣持がいんですよ。」

父は傍へ来て身を屈めた。(大急ぎで、臥床の傍で立停りもせず)。ポールは父の首に絡かかみ著いて、今の言葉を繰り返しく本氣になつて告げた。それからは、晝間といはず夜といはず、父の姿さへ見れば「心配してはいけませんよ。ほんとに僕は氣

持がよいのです。」

と聲を掛けた。朝毎に彼が「大分快い方だ。父様に申し上げて御呉れ。」といふやうになつたのは、之から始つたのである。

黄金色の水が何遍壁の上で躍つたか、幾晩暗い暗い河が海を指して流れ／＼たか、ポールは數へもせず、又數へやうともしなかつた。人々のやさしい親切が増せるものならば、其親切は確に増したので、ポールの其に對する感謝の情も益々深くなつて來た。しかし此哀れな子供の心には、此先の日數が多いか少ないかは殆ど念頭になかつた。

ある夜、ポールは母の事や、階下の客間にある母の肖像畫の事を考へて居た。「母様は父様が姉さんになさる位でなくもつと姉さんを可愛がつていらしたに違ひない。もう死にさうだと御思ひになつた時に、姉さんを抱いていらしたと云ふから。僕だつて是程に姉さんが大好きなのだが、死ぬ時に姉さんの近くでと願ふより他に望みがないのだ

からな。」など、想つた續きに「僕は自分の母様を見た事があるか一度訊いて見やうか知らむ。見たといつたか見ないといつたか、前に聞いた答をよく記憶しない。河がはやく流れて居て頭腦あたまが混雜してゐたので、」と考へた。

「ボ、姉さん、僕は母様を見た事ありますか。」

「フ、いゝえ。何故？」

「ボ」では、僕が赤ン坊の時には母様見たやうな優しい顔の人が僕を見てゐて呉れなかつたのですかね。」

と訊いた。そんな筈はない、何だか優しい顔の見覺があるやうなと思つた。

「フ、ありますよ。」

「ボ、誰なの。」

「フ、あなたの以前まへの乳母はあやよ。始終あなたは見てゐたのよ。」

「ボ、僕の以前の乳母？ 何處に居るの？ やッぱり死んでしまつたの？ 皆誰も／＼死んだの、エ姉

さん、——姉さんだけ置いて？」

室内が動揺めいた氣配であつたが、一寸の間で、やがて又元のやうに寂寞とした。フロレンスは蒼白の顔に微笑を浮べて、ボールの頭を抱へた。その腕は慄へてゐた。

ボ「姉さん、その乳母を呼んで頂戴どうぞ。」

フ「此處には居ないのよ。明日來ます、ね。」

ボ「さう、ありがたう。」

ボールは、目を閉ぢて眠つてしまつた。目が覺めた時には、日が高く昇つて、明け離れた日は晴れて暑かつた。ボールは、明け放してある窓を見、風にフラ／＼してゐる窓掛を眺めて、

ボ「姉さん、もう明日になつたの？　乳母は來まし

たか」と尋ねた。

誰か乳母を連れに行つたらしい。女中のスザンダツたかも知れない。さういへば、スザンが「直ぐに戻つて參りますよ。」と言つたやうだつたが、實際契へた言通りにしたのだから、全然出て行かなか

つたのだから、何にせよ、階段に足音がして、ボールはハツとまた目が覺めた。——心身ともに——而して臥床の上に起き上つた。周圍の人が明瞭見えた。今迄のやうに霧のかゝつたやうな氣持がなく、ボールは皆を認識して、一人／＼の名を呼んだ、

ボ「其から之れは誰？　これが僕の以前の乳母なの。」

と今入つて來た人を笑み零れて迎へた。

さうとも／＼。乳母でなくて、誰か此子を見て、涙を落し、「可愛い、坊ちやま、御可憐い御子様」など、呼ぶものか。乳母でなくて、誰がその臥床の傍に坐つて、この子の瘦せ細つた手を取つて、自分の脣や胸に當てるものか。乳母でなくて、誰か人前をも忘れこのやうに同情慈愛の情を露出しにするものか。

ボ「姉さん、乳母の顔は優しい良い顔ですね。僕は嬉しいよ。乳母、彼方へ行つてはいけない。

此處に居て御くれ。」

ボールの知覺は鋭敏になつて、ふと聞き覺えの名が耳に入つた。

ボ「ラルター(店の小僧)ツていつたのは誰? 誰だかラルターツて言ひましたよ。ラルターが此處に居るの。僕は遇ひたい。」と四邊を見廻した。

誰もすぐとは答へなかつた。父はやがてスザンに向つて「では呼び戻して來い。上がつて來いツて。」と言つた。ボールは、待つ間、ニコ／＼して珍らしさうに乳母を見、乳母がアロレンスを忘れてずに居たのを嬉しがつてゐたが、その内にラルターが入つて來た。この少年の快活な、無邪氣な顔貌と容子が、いつもボールに氣に入つてゐたので、今も一目ラルターを見ると、すぐに手を出して「さやうなら」といつた。ビブチンさんは、急いで臥床の上手かみてに來て、

ビ「さやうならですつて、ボールさん。さうではないでせう。」と聲を立てた。

一寸、ボールはビブチンさんに目を移して、以

前あの學校で、火の前に坐つて、ビブチンさんを眺めた時と同じ顔をしたが、落付いた調子で、

ボ「いゝえ、さやうならなのです。さやうなら、ラルター、さやうなら!」といつてラルターの方へ首を向け、手を伸しながら「父様は何處?」と尋ねた。

父の息が頬ほに觸れるのに氣付いて、ボールはその顔を見入りながら。

ボ「御父様。ラルターを願ひます。よう御坐んすか。僕ラルターが好きだったんですから。」と言つて、その弱い手を振り動かして、亦改めてラルターに「さやうなら」をする風であつた。

ボ「さ、横にして頂戴。姉さん、僕の傍へすつと近く來て下さい。而して僕に顔を見させて下さい。」姉弟互に腕を組み合せた。黄色の光線が流れ込んで來て抱き合つてゐる二人を照した。

ボ「河がドン／＼流れて居ますよ。兩岸に葦があつて青々してゐる中を、姉さん。もう河は海に

近いの。あ、波の音が聞こえる。」

暫時してポールは又語つた。河の上を自分の乗つてゆく小舟が軽く揺れて、眠氣が生じて來たとか、河岸が青々して、其處に咲いてゐる花の色が美しく、葦が背が高いとか、あれ、小舟が海に出て平らに滑るやうに走つてゆく、向ひの方に岸が見えて來た、其處に立つて居るのは誰だろう。など、ポールは、祈禱をする時にいつも爲るやうに、

應 接 十 分 間

客「みどりさん先日お約束の繁さんのお話して下

さいな」

み「あさうで御座いましたね、ちや申上ませうか。

とある日私は子供を歸してから例の如くせつせと掃除をして居りますと繁さんのお祖父さんが見えて。

「先生坊やもう歸りましたか。

手を合せた。その爲に態々腕を動かさないで、姉の首の後部で手の先を合せたので。

ボ「母様は、姉さんに似て居ますよ。顔で直ぐと母様だといふ事はわかる。此家の階下にある版畫は神々しさが足りません。御頭部の邊の後光が僕にまともに放射してゐる。」

黄金色の光の波は壁の上に再び來たが、室内に動くものはもう何も無かつた。(完)

み ど り

「おや、お逢ひになりませんでしたか今しがた小学校の重ちゃんと一緒に歸りましたが。

「あ、さようで、ちや、道が違ひましたんで御座いませう唯々々。

後は聞かずに返事許りして歸て行かれる。

其後影見送て私は思はず吹き出しました。

何故ならあの脊の高い、顔の長い、鼻の頭の赤